

国際交流基金事業紹介
こくさいこうりゅうききんじぎょうしょうかい

日本に滞在して教材やカリキュラムを開発する
にほんにたいざいしてきょうざいりやかりきゅらむを開発する

「日本語教育フェローシップ」(2)

にほんごきょういく

～小学生用日本語教科書の作成：曾麗雲氏へのインタビュー～
しょうがくせいようにほんごきょうかしょさくせいそれいうんし

日本語国際センター制作事業課・情報交流課
にほんごこくさいせいさくじぎょうかじょうほうこうりゅうか

『日本語教育通信』第46号で、「日本語教育フェローシップ」(1)として、フェローシップの目的や採用条件などの概要を紹介しました。今回は同フェローシップが高い成果を上げた例の一つとして、「小学生用日本語教材の制作」というプロジェクトのため、中国から来日されていた、曾麗雲氏(遼寧省基礎教育教學研修センター所属)へのインタビューを掲載します(インタビューは2003年4月に行いました)。



曾先生
そせんせい

<小学生向け日本語教科書制作プロジェクト開始の背景>

Q: まず、曾先生が、中国の小学生用の日本語の教科書を作るようになったきっかけと背景を、お話しいただけますか。

A: 中国では、政府の指示で、小学校での英語教育が2001年から始まりました。実は、それ以前から、条件の整った学校では英語や日本語などの外国語教育は行われていましたが、これほど全国レベルではありませんでした。ですので、日本語教育は英語教育に追いやられてしまうのではないかという危機感がありました。また、私は遼寧省基礎教育教學研修センター(注1)の一人として、学校現場をよく視察するのですが、大連市のある小学校に行ったときに、実際に教師や生徒たちから、今ある日本語の教科書は「面白くない、いくら勉強しても話せるようにならない」という声を聞き、コミュニケーション力を重視した教科書を作りたいと思うようになりました。幸い、国際交流基金北京事務所からも様々な助言をいただき、また私の所属先からも許可を得ることができたので、このプロジェクトが始まったのです。

<フェローシップ申請前の仕事～試用版の作成～>

Q: 今回、制作された教科書は、小学校3年生から6年生が対象ですね。この教科書を作るにあたっての指針は、どのようなものだったのですか？

A: 中国でのこれまでの日本語の教科書は、ただ言葉を教えることを目的としたものですが、今度作る教科書では、言葉を通して、同じ年代の子供達の生活ぶりとか行動パターンとか言葉遣いとかを教えたい、そう思いながら、今まで出た小学生向けの英語や日本語の教科書、例えば『楽しい英語(快乐英语)』(遼寧師範大学編集/遼寧師範大学出版社/1997年)とか、『ひろこさんの たのしい にほんご』(根本牧、他著/凡人社/1986年)、『たのしい こどもの にほんご』(山田伸子著/大新書局(台湾)発行 凡人社発売/1992年)などを参考にしながら、アイデアを固めていきました。そうして作り上げた試用版を、現場で1年間使ってもらい、2～3回修正を加えながら、教科書の原稿を完成させていきました。

Q: その最初の試用版を作るのに、どのくらいの期間がかかりましたか？

A: 2001年4月に作り始めたのですが、その年の9月から試用版を学校で使い始めようとしていたので、印刷のための時間もあって、原稿を完成させて入稿したのは7月末でした。つまり、3ヶ月半で作り上げたことになります。

Q: そんなに短期間だったのですか。曾先生は、これまで教科書を作られた経験があったのですか？

A: 中学生向けのヒアリング教材を作って、出版したことがあります。それから、国レベルでの高校の日本語科の学習要領を作る仕事にも参加してきましたので、今回教材を作る時も、できるだけそうした学習要領(当時、すでに存在していた小学校英語の学習要領と義務教育課程の日本語学習要領)に添って作ろうと試みました。

Q: 実際出版された『小学日語教材』は、中国語表記は巻頭と巻末の数ページだけで、中味の大半は日本語だけで作られています。これは、全ページにカラーのイラストをたくさん入れることで、子供達に理解させようという方針ですね。これらのイラストも試用版の時から入っていたのですか？

A: 試用版の時は、白黒印刷で、イラストも魯迅美術学院の学生さんに頼んで描いてもらったものです。場面設定や登場人物は出版したものと同じですが、絵の感じは随分違います。イラストを描く学生は、日本語はわからないし、日本の雰囲気とかも知

らないので、こちらの思うような絵を描いてもらうのは大変でした。いろいろ考えた末、登場人物は、中国に住んでいる日本人の子供をモデルにすることにしましたのです。

<来日してから～日本の小学生の協力～>

Q：フェロシップを2度受けられています、2回とも来日の大きな目的は、『小学日語教材』に付いている音声テープの制作でした(注2)。

A：はい。プロジェクトの初めから音声テープは、子供の声にしよと思っていました。

子供は言葉ができなくても、雰囲気で心が通じるところがありますから。フェロシップ担当の制作事業課の尽力で、日本語国際センター近くにある小学校の子供達に、歌や会話の収録に協力してもらいました。子供達は、皆とても歌が上手で、またとても楽しい雰囲気録音できたので良かったです。実際に、この音声テープは大好評で、中国の子供達も皆とても喜んで聞いています。

また、音声の録音だけではなく、今の子供達の言葉遣いも大いに参考にさせてもらいました。『小学日語教材』は、なるべく自然な子供の言葉で編集しようと思っていたので、子供達が実際にどんな言葉を使って自分の言いたいことを表現しているか、収録を手伝ってくれた子供達に聞いて決めたいです。

Q：たとえば、どのようなことがありますか？

A：子供が、友達に自分の妹を紹介する時どうしますか？「この人は私の妹」じゃ、ちょっと大人っぽいでしょう。今の小学生に聞いたら、「これ」だったんですよ。

「これ、ほくの妹」「これ、ほくの妹だよ」と言うんですね。他には、日本人の家に行った時に、家の方が言う言葉は、「どうぞお上がってください」であると私たちは習ったのですが、これも今の子供達に聞いてみると、「お入りください」の方がよく使われているみたいなんです。今の子供達が住んでいるのは、一軒家よりマンションの方が多いですし、また学校でも「お入りください」ですから。

Q：そうですね。玄関の上がりかましが、マンションだと大分低いんですね。上がるって感じじゃなくなっていますよね。

A：やっぱりね、言葉の使い方は、日常生活が変わるにつれて変わるものですから。



会話収録風景：日本語国際センターにて



歌の収録風景：日本語国際センターにて

<歌曲の掲載と著作権>

Q：『小学日語教材』は、試用版の時よりも、ずっとたくさんの子供の歌が入っていますね。

A：ええ。でも、著作権の問題があって、歌詞は掲載できたのですが、楽譜を載せることはできなかったのです。楽譜を入れようとすると、著作権はちょっと面倒です。

Q：著作権者との交渉は、日本に来てからされたのですか？

A：はい。でも、私は著作権のことがよくわからなくて、このプロジェクトの協力団体である(財)国際文化フォーラムにだいで助けてもらいました。

Q：著作権料を払うような曲はあったのですか？

A：はい。第1・2冊の時は、民謡とかかわらべ歌とか作者不明のものが多かったのですが、それほどお金がかからなかったのですが、第3・4冊の時は、比較的新しい歌を入れたので、少し費用がかかりました。やはり子供はだんだん大きくなって、現在の日本にも興味を持ち出す頃なので、最近の歌がいいと考えたのです。

Q：たとえば、どういう歌が入っているのですか？

A：そうですね。たとえば、ちょっと古いですが「お正月」、モシモシ カメヨ～♪の「うさぎとかめ」とかですね。「棒が一本あったとさ」という歌いながら絵を描く絵かき歌もあります。それから「今日の日はさようなら」。6年生くらいの子供にもは、詞の内容として、これからの夢とか、自分が何になりたいかとかを入れる必要があるのです。そうしたこともあわせて考えました。

<フェロシップ終了後、実際に出版するまで>

Q：実際に、出版する際は、国際交流基金の他の助成プログラムを利用されたのですよね？

A：はい。「日本語教材制作助成」(注3)というプログラムに申請しました。これは、出版経費の半分までを助成すると申請案内に書いてあったので、第1・2冊発行のための出版経費600万円の半分を申請しました。残りの半分は出版社に負担してもらうこと

とにしていたのですが、最終的に助成してもらえるのが150万円という通知が来たので、出版社との間で問題になり、それから慌てて資金集めに走り回るようになりました。結局、(財)国際文化フォーラムがいろいろと動いてくれて三菱銀行国際財団とともに援助をしてくれました。他にも経費削減の工夫をしたりして、なんとか出版することができたのです。



小学日语教材 第三册 P22-23
しょうがくにくう ごきょうざい だいさんさつ

Q：原稿ができて、出版できるまでが、また大変なのですね。

A：はい。教材を編集する仕事は自分の力でできますが、それ以外のことは、私一人の力ではどうしようもないことも多くて、ハラハラしました。ちなみに、この『小学日语教材』には、他にも教師用の参考書と問題集があるのですが、参考書の方は、JICA(注4)の助成で出版しています。

Q：本当にいろいろな所から援助をもらっているのですね。ところで、最初の2冊は、それぞれ何部印刷して、いくらで販売したのですか？

A：それぞれ3,000部印刷しました。遼寧省、黒龍江省、吉林省と河南省、これら4省の小学生の日本語学習者数がだいたい3,000人くらいですから。値段は、1冊が11元、日本円で160~170円くらいです。普通の小説とかの単行本が15~17元ですから、ずいぶん安いんです。音声テープの方は、テープ2本で1巻となっていて、これは教科書の第1冊分に対応するのですが、その1巻で13元です。普通の音楽テープでしたら、テープ1本で10元くらいです。

Q：ずいぶん安いんですね。こんな立派なケースに入っていて、テープ2本で13元なんて。

A：ええ。中国では、教科書の値段を決めるのに、政府の制限があるんです。制限があっても、もし何十万部も売れるなら、出版社に利益が出ます。実際、英語だったら、学習者数が多いから、出版社はもうかりますね。そういう背景があるので、中国政府や省や県などが、教科書作成にお金を出そうとはしないんです。でも、日本語、特に小学生の日本語学習者は、まだまだ少ないですからね、3,000部が全部売れても赤字になってしまいます。それに、日本語を習っている子供達は、地方の、それほど裕福ではない地域の子供が多いですから、出版社がコストを回収できるような値段にしたら、ますます売れないです。

Q：でも、教科書ですから、毎年需要がありますよね。長い目で見れば、出版社も元が取れるのではないですか？

A：全ページがカラーなので、基本的な印刷費用がけっこうかかります。1回の発行が3,000部程度だと、出版社はやはり赤字なんです。

Q：そうですか。日本語を勉強する子供が増えなければ、出版し続けることさえ困難という感じですね。中国の他の省でも使うようになれば、出版社も積極的になるのかもしれないですね。

A：ええ。中国全土に宣伝するための方法が限られているので、急激に発行部数を増やすのは難しいのですが、国際交流基金や(財)国際文化フォーラムの広報物などで宣伝してもらったりして、今努力しているところです。もし、この記事を読んで、『小学日语教材』を入手したいと思う方がいたら、是非出版社である遼寧少年儿童出版社(辽宁少年儿童出版社)にご連絡ください(Tel: 0086-24-23284269 Fax: 0086-24-23284272 E-mail: sezbs@mail.lnpgc.com.cn)。

Q：こうした良質の日本語教材が、現地で発行され続けることを願っています。今日は、どうもありがとうございました。

| | |
|---|---|
| <p>注1：日本の教育委員会のような組織で、小中高校の教授法研究や教員研修を行っている。</p> <p>注2：曾先生は、平成13年(2001年)度と平成14年(2002年)度の2度にわたり、それぞれ数ヶ月のフェローシップを受けられました。1回目は、第1冊と第2冊の作成、2回目は続編の第3冊と第4冊の作成のための来日でした。</p> <p>注3：一年以内に出版が確実な教材などについて出版費の一部を助成する</p> | <p>プログラムです。助成金の上限は、基本的には全経費の1/4ですが、いわゆるODA地域については1/2となっています。ただし、いずれの場合も200万円を超えることはなく、さらに状況に応じ金額が査定されます。近年は予算が厳しく最高でも150万円の助成額となっています。</p> <p>注4：独立行政法人 国際協力機構(元、国際協力事業団)</p> |
|---|---|

～制作事業課より～

「日本語教育フェローシップ」「日本語教材助成」双方とも、全世界からの申請を毎年12月に受け付け、専門家による客観的な審査に加え、教材の「必要性」「有効性」や地域バランスなどを配慮しながら採否を決定します。今回紹介する曾先生のプロジェクトは、2回にわたってフェローシップを受け、教材制作助成も受けた稀なケースですが、申請のつど厳正な審査を受け、その重要性和内容的な価値が認められたものです。一般的に、国際交流基金の支援はプロジェクトにとって補完的な役割しか果たせませんので、申請の際には、プロジェクトの内容面だけでなく、国際交流基金以外の支援機関も確保するなど、体制面・費用面でもしっかりした計画を立てておくことをお勧めします。